



TITLE:

ナンセンス二題

AUTHOR(S):

CITATION:

ナンセンス二題. 天界 1931, 11(120): 239-240

ISSUE DATE:

1931-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161637>

RIGHT:

ナンセンス二題

「おーい、御花が散るど！」

誰言ふとなく村人の聲がすると人々は争つて裏の北山へと駈上つて行つた。彼岸の中日の日だつた。誰が言出したのか村の古老の口にしたのを真にうけて今當に西天に没せんとして赤くかがやいてゐるが餘りまぶしくもない太陽を眺める爲だつた。と言ふのは彼岸の中日には太陽は花火の様に散りながら没すると言傳へられてゐたからだ。

今時そんな事を言へば貴方々からは頭から相手にされぬか 知れないが僕の地方の人々は今も猶それを信じて 彼岸の中日が来れば必ず西天を仰ぐのである。そうしてその日曇つてでもゐると「拜めない」と残念相に言ふのである。そんなことはないと説明しても聞かぬこんな人達に月のアバタ面や土星の輪を見せたら 何んと言ふだらうと考へて自分の小反射鏡の完成の日をゆめみて一人微笑するのである。それは別としてどうしてこんな傳説が生れたのか、他の地方でもそう言ふのかと思つて自身 不思議でならない。

× × × × × ×

もう一つ、それは舊の九月廿三日の夜の月が三つ(これをある古老は三體と勿體がつて言ひ、この二つの話も大體この古老に出たものだつたらしい。この位の年の人としては珍しい人で種々の自然現象や簡単な數學の理論—と言ふより理窟について若い我々をよく煙にまいたものである。昭和三年の九月頃八十歳で他界した) 竝んで出て、然も その一つ一つに佛様が宿つてゐると言ふのである。貴方々は笑ふかも知れないが……

私の父なども私の幼頃近所の人達と一緒に珍らしく思つたのか 見に態々起きて後程大きなウソだとかほしてゐたのを覚えてゐる。私も その後時々好奇心から注意したが何んの變哲もなかつたことは 言ふ迄もない、こんなことを古川龍城氏の「天界の智囊」の中で何時か見た様に 記憶してゐるが餘程以前のことなので或は私の考異いかも知れないから 斷言出来ない、兎に角これも僕の地方で古くからある天體についての傳説の一つ、

正直な田舎の人達が 有難いと觀音様を拜む積りで涙流して月を仰いだら

その目に月が三つ重つた様に見えたのだらう……，茶化した様だが幼い頃
母に吐られて泣いた時涙でぬれた自分の目に電燈が幾つにも重つて見えた
経験がある。これ等について聞知される方があれば知りたいものだ，こゝ
四五日雨に降られて観測もならず徒然なるまゝに筆とつてつまらぬこと書
いた。読んで下さる方もその積で。

小楨氏を知りて

あこがれし，流れる星の守人を我見出しぬ紀伊の磯邊に
飛ぶ星を見つよもすがら立ちつゝも我導かむ人を思へり

荒木氏を知りて

西海に黄道光の主ありき求むれば今一人師を得ぬ

同好會に入りて

人の世に一人辿らむ身にしあれどこゝに友あり一つ心の
ゆかりなき身は今とりぬいこふべき星故結ぶこのつどひをば

(1931, 15夜, 紀伊野上, 秋馬生)

天界前號附録「趣味の天文學」正誤表

條 項	誤	正
(9) 天王星	URAUNS	URANUS
一等星の名稱	アルゴン座	アルゴ座
長週期變光星	白鳥の τ	白鳥の γ
銀河星團	μ 及 β τ	h 及 β γ
球狀星團	Golbular	Globular
星霧	イ發見星霧	イ發光星霧
暗黒星霧	ひの ρ	蛇遣ひの ρ
星の數	根 根	極 根
天體の距離	太陽星圖	太陽星團
視線運動	毎秒 1,500 軒	毎秒 11,500 軒
Jeans の太陽系生成説	プロバビティ	プロバビリテイ